



香港

HKCCの2020年活動総括報告

●HKCCホームページ https://www.consumer.org.hk/ws_en/news/press/2020-year-ender.html

パンデミックで異例の年となった2020年、社会活動の減少と経済の落ち込みにもかかわらずHKCC（香港消費者委員会）に寄せられた相談件数は前年比26%増の30,935件に上った。最も多かったのは旅行関連で、前年の2,232件から5,371件に増加。世界的な航空・旅行業界の停止状況が大きく影響し、旅行の変更や中止など航空券についての相談が8割を占め、そのうち旅行会社2社の倒産によるものも1,000件を超えた。次に多かったのは、医療・健康機器関連で4,699件で95%以上がマスク関連であった（前年比640倍）。以下、通信サービス、家電製品、食品など。自粛生活で在宅時間が増え、ネット注文が増加したため、オンラインショッピングに関する相談が前年比約3倍の13,642件と急増し、全体の45%を占めた。内訳は、マスク関連が最多で、遅

配や紛失、料金などに関するものが多かった。

HKCCは早い時期からマスク、消毒剤等の品不足に乗じる粗悪品・模造品の販売や価格高騰について注意喚起し、是正を求め、日用品や食料品のパニック購買に対処すべく輸入業者と供給を検証するなど、冷静な消費行動を促す活動を迅速に行った。また、感染症対策製品の商品テスト結果やマスクの手作り方法などを情報誌「せんたく選択」に掲載したほか、最新かつ信頼性の高い情報を一括して提供するウェブサイト「一緒にCOVID-19と闘おう」を立ち上げた。

HKCCは、パンデミック後の消費生活の復活を見据えて、厳格な商品テストや調査分析に基づき信頼される情報を適時に発信し、持続可能で責任ある消費文化を積極的に推進して、権威ある消費者ガイドの役目を果たすよう努めるとしている。



アメリカ

子どもに安全な電子レンジに

●アメリカ科学振興協会ホームページ https://www.eurekalert.org/pub_releases/2021-01/rumc-mms011921.php
●アメリカ小児科学会ジャーナル <https://pediatrics.aappublications.org/content/early/2021/01/18/peds.2020-021519?versioned=true>

アメリカでは、2023年3月より電子レンジのUL（安全機関）の安全規格に子どもが開けにくいドアの要件が追加される。同規格に適合する製品を販売したいメーカーは、ドアを開ける際に個別の2段階動作を要する構造にするとともに、警告ラベルも貼付しなければならなくなる。

アメリカやけど協会によると、全国の医療機関のやけどケアユニット（重傷者対象）の患者の22.5%は子どもで、その原因は火災の炎ではない場合が多いという。ラッシュ大学医療センターやシカゴ大学やけどケアユニットなどの医師らによる調査では、多くの子どもが電子レンジのドアを開けて中の食品を取り出す際にやけどを負い、半数以上が皮膚移植を要する重症、最年少は1歳半であったという。

医師らが健康な子ども（生後15カ月～4歳）を対

象に調査したところ、17カ月の幼児でも電子レンジのドアを押して開けるタイプ・引いて開けるタイプの両方とも簡単に開けて、加熱し、中の物を取り出すことが可能であり、2歳ではほとんどの子どもが可能であった。また、電子レンジの新たなドアのデザインを開発、その実現可能性を実証し、さらに、悲惨な小児やけどを紹介するビデオで電子レンジの開閉とやけどの関連性を周知するなどした結果、2回目の技術検討会においてUL安全規格の変更案が採択されたという。

新規格のドア装備の電子レンジが店頭に並ぶまでにはまだ時間がかかる。医師らは、小さな子どもの親や保護者に対し、ガスレンジと同様に電子レンジも熱くなることを常に念頭に置き、子どもを電子レンジに近づけないよう注意喚起している。

フランス

ボール状菓子による子どもの窒息事故を受けて

- フランス国立消費研究所ホームページ <https://www.60millions-mag.com/2021/01/07/bonbons-boules-magiques-des-annees-d-alerte-et-un-deces-18169>
- DGCCRF ホームページ https://www.economie.gouv.fr/files/files/directions_services/dgccrf/presse/communiqu/2019/CP-Bulles-eau.pdf

子どもが食品をのどや気管に詰まらせ、窒息する事故が後を絶たない。フランス北東部の小さな町で、ボール状の菓子を食べた12歳の少女が窒息死した事故は、瞬く間に国内で知られることとなった。彼女の母親が、菓子の輸入販売会社宛てに出した要望メールをインターネット上で公開したからである。

母親によると、事故が発生したのは2020年8月。昼食後、娘にキャンディーを与えたところ、窒息したため消防を呼んだが、助からなかったのだという。母親が問題視するのは、菓子の形状である。ガムを糖衣でコーティングしたボール状で、直径は2.2cmもあるという。外側が硬いため、かみ砕くのは非常に難しく、ガムに達するまで、口の中でじっくりと糖衣を溶かす必要があると指摘する。

もっとも、母親は菓子の販売中止を求めているわけではなく、子どもの窒息を防ぐ形状に改めること、年齢制限について包装に明記することを要望している。母親の訴えは反響を呼び、多くの署名が集まったほか、同種の菓子の安全対策について政府に公式に質問する地元議員も現れた。事業者は対象年齢の表示を決定したが、今後の対応も注目されている。

同国では、食品と間違えやすい製品を子どもが誤飲する事故も起きている。水を吸うと何百倍にも膨らむボール状樹脂製品もその1つである。子どもが飲み込むと腸閉塞や窒息を引き起こす可能性があるとして、DGCCRF（競争・消費・詐欺防止総局）等は警告している*。20カ月の娘の死亡事故も報告されているという。

* 日本では、国民生活センターが同様の注意喚起を実施 http://www.kokusen.go.jp/news/data/n-20151001_1.html

ドイツ

手作りの入浴剤もお勧め

- エコ・テスト：2020年12月号 https://www.oekotest.de/kosmetik-wellness/Schaumbad-Badeoel-Co-Diese-Badezusatzstoffe-sind-empfehlenswert_11575_1.html

ドイツ人の入浴習慣は日本人とはかなり異なる。浴槽にお湯を張ることはほとんどなく、シャワーだけですませるのが通常である。それを裏付けるように、エコ・テストは「入浴は週に2回で十分」とする。湯の温度が高いと肌が乾燥するほか、水の浪費になるからだという。ただし、風邪の引き始めやリラックスタイムしたいときは、入浴剤入りのぬるいお湯に15分ほど浸かるとよいとされる。入浴剤の種類も豊富で、古典的な泡風呂タイプのものから、バスソルト、バスボムや菓子のような外観の商品まである。そこで、同誌は入浴剤50商品のテストを実施した。

その結果、成分的に非の打ちどころのない18商品（自然化粧品認証の10商品をすべて含む）が「非常によい」という高評価となった。また、それに続く23商品も「よい」と判定された。その一方、合成香

料リリールまたは合成ムスク（もしくは両方）を含む3商品に不合格点が付いた。リリールは生殖器官に悪影響を及ぼすといわれている。合成ムスクは、ジャコウジカから採取されるじゃ香の代替香料で、脂肪組織に蓄積されやすいと指摘されている。

市販の入浴剤の素材に不安がある人には手作りを勧めており、同誌は入浴剤2種類の作り方を掲載した。炭酸水素ナトリウム（重曹）、クエン酸、カカオバター等を菓子の型に入れ、精油、ドライフラワーを加えて固めると、お湯の中でシュワシュワと溶けるバスボムになるという。また、粒が粗い岩塩または死海の塩に精油とドライフラワー（好みに応じてバラ、ラベンダー、キンセンカ等）を加えると、バスソルトになるという。見た目が華やかなので、贈り物にも向くと紹介する。